

大澤幹夫「戯曲 原爆の子」論

—— 作文集『原爆の子』受容の一端 ——

藤 本 佳 弓

論者が主たる研究対象とするのは広島大学の教育学者長田新（一八八七—一九六二）が編纂した作文集『原爆の子』（一九五二）の広がりである⁽¹⁾。（引用の中略、傍線、□囲みは論者による。以下同）。

原子爆弾が人間の精神にどんな影響を与えたか、特に当時まだ学齢以前の幼児（中略）勉学の途上にあつた少年・少女たちの純真で、無邪気で、感受性の強い、柔らかな魂が、あの原子爆弾で何を体験し、そして何を考えているかを知ること（中略）あらゆる階層の人々にとつて一層関心の強い、そして大きな意味と価値とをもつ問題ではなからうか。

（『原爆の子』六頁）

このような判断のもと蒐集・選定された約一九〇名の作文集は、出版されるや多方面で共鳴を呼び、紙芝居・映画・絵本等の分野で二次創作が盛んに行われていく。またエスペラント抄訳等を通じて海外からも支持を集めたことが『原爆の子にこたえて』（一

九五三）前半に掲載された手紙文から読み取れる⁽²⁾。本書は国内外の反響を受けて長田が上梓したものが、その後半には戯曲作品が収録された。作者の大澤幹夫（一九二一—一九九〇）はこの前年、血のメーデー事件を「忘れぬ五月一日⁽³⁾」と題して同月中旬に戯曲化したという気力旺盛な左派劇作家である。本稿では長田に公式認定された「戯曲 原爆の子」完全版（序曲および三幕）を分析し⁽⁴⁾、原爆の子像が芸術・芸能・教育分野で再生産される様相を考える手がかりとしたい。

一・理想の原爆の子像と芸術作品

原爆の子像という一九五八年前後から人口に膾炙してきた折り鶴とサダコの物語を想起しうだが⁽⁵⁾、ここでは長田編纂の作文集に立脚したイメージを指して用いる。一九五一年、長田は原爆の子の姿を「か細い喉を振わせ」る「平和のフェニックス（不死鳥）」⁽⁶⁾や「焼け跡の中から萌え出た若芽」にたとえ、「いじら

しくもあれば、また何となく痛々しい」と形容した⁽⁸⁾。

これらは二年後の『原爆の子にこたえて』では理想的に進化を遂げる。長田は「民族としての誇りに満ちた若芽が平和と独立とを目指して力強くのびゆく姿は何びとも否定できないまでになった」とした上で、「今日の日本のおとなに信頼も期待もできなくなった私は、こうした平和の不死鳥原爆の子にのみ信頼と期待とをかけている」とまで宣言している⁽⁹⁾。敗戦や朝鮮戦争勃発に伴う社会や政治の方針転換は、峠三吉編『詩集 原子雲の下より』（一九五二）の子供の詩に散見されるような大人批判を誘発し⁽¹⁰⁾、「大人はウソツキだ」という子供たちの声を長田の中で増幅させたと考えられる⁽¹¹⁾。その背景には戦時中体制協力的な発言をしていた罪悪感も読み取ることができらる⁽¹²⁾が、大人不信を公言する長田には「私が、平和運動の決意をしたのは、実は恥しいほど単純で、まるで小学一年生のような考えである」として、自分を子供にたとえる発言も見受けられる⁽¹³⁾。こうした言動の含意を探るには、映画『二十四の瞳』（一九五四）についての佐藤忠男の考察が興味深い。

戦争への反省を要求されていた日本人は、あの頃自分たちは子どものように無知で無邪気で無責任な存在だったと思いたかったのであり、この映画はその気分を満足させてくれたのである。

『二十四の瞳』が熱烈に受け入れられた世相を「国民的な規模の一種の幼児退行」ととらえた佐藤の指摘は⁽¹⁴⁾、一九五一年に作

文集『原爆の子』が注目を浴びた理由も説明するかもしれない⁽¹⁵⁾。ただ思うに、この「幼児退行」は長田個人においても働いた防衛機制だが、それは単なる現実逃避的態度ではなかった。長田の中に呼び覚まされた子供心は、子供本位の平和運動の推進力となった。その一方、「広島の少年少女のうったえ」を届けようとした一連の取り組みには、教育に携わる大人としての使命感もうかがえる。

一九五二年、原爆の子友の会の結成を助ける傍ら⁽¹⁶⁾、日本子どもを守る会を結成した長田は、助け守るべき原爆の子の理想像を掲げ、芸術分野で作品化することにも意欲を示した。次の引用は彼が示した「原爆を主題とする芸術作品」への提言である。

敗戦後今日にいたるまで日本のおかれている困難な条件のもとで、原爆を主題とする芸術作品が小説・詩・絵画・映画など多くの分野でつぎつぎに現れてきたことは、もちろんきわめて意義深いことではあるが、（中略）原爆の衝撃によって打ちのめされた虚脱・痴ほうの状態を観念の中でいたずらに誇大につくりあげ、民族としての誇りと怒りを失った絶望的でニヒルな人間像を、単に地獄絵図としてのみ描くことによつて、あたかも原爆が天災でもあるかのような敗北主義に終っている。しかしこれでは単なる原爆エレジーではないか。（中略）原爆の惨害にもめげず、雄々しく立ちあがりつつある原爆の子らの姿をとらえ、のびゆく人間像を示すことなしには、はたして心身ともに傷ついた広島・長崎の市民みずから立ちあがらせ、さらにはわれわれの同胞を民族の独

立と平和とのためにふるい立たせることができるであろうか。

〔原爆の子にこたえて〕三、四頁

原爆の子に「雄々しく立ち上が」れと願う長田の主張は、原爆の子友の会のモットーにおいても繰り返されるものだが、この表現はもともと作文集に採録された武内健二（被爆当時小学六年生・執筆当時高校三年生）の文章からとられたものである。

私の父は、一瞬にして妻と子を失い、当時はもう生きる望みさえなくしてしまった。だが、後に残された二人の姉と私を路頭に迷わし、哀れな戦災孤児として残して死んでいくことにし、のびず、涙の乾きやらぬ頬をぬぐって、おおしく立ち上がり、私たち姉弟も父をたすけ、おたがいにはげましあって、ようやく今日に至ったのである。これというのも、亡くなった母や兄が私たち一家を見守っていてくれるからであろう。

〔原爆の子〕二四一頁

武内の手記は作文集序文での長田の紹介もあつて脚光を浴びた。まず稲庭桂子（一九一六―七五）と佐藤忠良（一九二二―二〇一一）の紙芝居『平和のちかい』（一九五二）でいち早く作品化され⁽⁷⁾、この紙芝居は日教組主導の平和教育ともタイアップして二か月で初版発売、同年再版となった⁽⁸⁾。また「戯曲 原爆の子」や映画『ひろしま』の主要登場人物の設定の一部は武内の作文に由来している。

さて彼の作文のハイライトは「子どもたちのために」妻を見捨てて逃げざるを得なかった父の苦悩である。引用部を読めば分かるように武内の文章で「おおしく立ち上が」った主語は原爆の子自身ではなく、その父親だ。父の態度を原爆の子の理念として読みかえた理由について長田自ら説明したのは要調査だが、少なくとも以下の仮説は成り立つだろう。つまり長田は原爆の子像を語ることで自身を含めた大人の目指すべき理想像を模索していたのである。

このように長田は大人と子供の立場を行き来しながらも、理想の原爆の子像を芸術作品のモチーフとすることを推奨し、「今後民族が雄々しく立あがる萌芽を見つけ、苦悩の中から立ちあがる運命打開の力、民族抵抗の姿、さては民族の誇りを力強く描き歌い上げなくてはならない」と主張している⁽⁹⁾。

二・大澤幹夫と「戯曲 原爆の子」

戯曲作品において長田の期待にこたえたのが大澤幹夫だった。

長田は自著に収めた大澤の作品を、「原爆の子らの熱望にこたえて、広島に滞在すること二箇月、親しく原爆の子らに接し、被害者の家庭にはいつてその家族と起居をともにし、生ま生ましい客観的な資料にもとづいて執筆」されたと紹介した⁽¹⁰⁾。

大澤幹夫は熊本生まれの劇作家である⁽¹¹⁾。広島高等師範学校英語科中退後、東京左翼劇場に所属。一九三三年には久保菜演出で『機関庫』を発表したほか、小林多喜二による反戦的中編小説『沼尻村』を脚色し、コップ常任、プロット書記長としても活動した。

同時期に日教組を後援者とし、演者に原爆の子友の会を想定して書かれたのが「戯曲 原爆の子」である。⁽²⁷⁾

序曲と三幕からなる本作は三十人以上の登場人物による群像劇だが、以下に場面構成と、焦点を当てる中心的人物をまとめておく。

序曲は原爆投下直前の広島の日常に始まり、投下直後の街の惨状や救護所での多くの死別が、音響や照明を駆使して描かれる。原爆戯曲は、舞台の上で生身の人間が演じるといふ制約から、時代設定を原爆投下後数年経過した時点とすることが多いが⁽²⁸⁾、本作は序曲を演じた場合においてはこの類型から外れ、映画『ひろしま』同様、被爆者自身が被爆当時の広島を再現する手法がとられた。

第一幕では七年目の夏を迎えた広島市内のバラック建ての家庭を舞台に、原爆の子達が十人十色に抱える問題と、結束の必要性が示される。第二幕、原爆の子らは自作の紙芝居を携えて孤児収容施設を訪れ、職員たちとのやり取りを通して施設の直面する財政難や日本社会のアメリカ依存が批判的に描かれる。第三幕では主人公の少年が原爆症のため病院で死去し、すかさずABCがその献体を要求する。主人公の母親はこれを拒み、続く幻想場面で甦った少年は平和な日本の未来の姿を目の当たりにする。

主人公は被爆によって母子家庭の長男となった不二夫（高校二年生）である。彼と妹のさなえ（小学六年生）それぞれのネーミングは長田の言う「不死鳥」と「新芽」にちなんだと考えられるが、理想的人格を付与された不二夫と対照的に「性格のゆがみ⁽²⁹⁾」を加えられた原爆孤児の竜介（高校三年生）や、登場回数は少な

いが「原爆乙女」との関連で語られる陽子（中学三年生）についても本稿では言及したい⁽³⁰⁾。

次節からは、抽出したテーマ（大人批判・アメリカ批判・原子力の平和利用）に沿って原作や他作品との関わりも視野に入れつつ考察する。

三、少年達による大人批判

本節では、長田の問題意識に端を発した大人批判をテーマに扱う。まず指摘しておきたいのが、序曲ではこの描写が抑制されていることだ。特に当時の兵士たちの救護活動を好意的に描いている点は、先行する紙芝居でクローズアップされた被爆直後の無慈悲な兵隊像とは趣が異なる。大澤が武内の記録した兵隊像を踏襲しなかったのは、他の作文に親切な兵士についての記述が複数あったからでもあろうが、ここでは兵隊に特化した批判的描写を避け、第一幕以降描かれる子供と大人の不穏な関係性に焦点を当てる狙いがあったと考えられる。

第一幕では貧しいながらも母（フキ）・妹（さなえ）と暮す不二夫が、自ら結成した平和の鳩の会（モデルは原爆の子友の会）会員を集めて、国際医師会議に提出する原爆症調査報告書の作成や紙芝居づくりなど「いまのぼくたちにもできる」平和運動を行う。

この条で注目すべきは、鳩の会の会員でありながら集会に参加できない二人の登場人物（竜介・陽子）である。このうち陽子は原爆によって兄弟全てを失い、酒とパチンコに溺れる父との生活の中で小児結核を発症し、大阪の病院へ送られていた。原作序文で

長田は、「両親の何れかを失った子供達の手記の中には、家庭という一つの社会が、父親か母親のアナキーな行動によって分裂し破壊されて」いる記述があると指摘した⁽³¹⁾。劇中、こうした薄幸の境遇に設定され、他の子供達から「おとなしい」と評される陽子は、入院費用のため仕事に追われる父から「原爆乙女を見ならえ」と追い打ちをかけられる。

これを聞いた舞台上の子供達は「原爆乙女⁽³²⁾」は「見せ物」だと意見し、「おとなのひとは、よくそんなことを冗談ともまじめともつかずに平気でいいますね」と憤慨するが、陽子の父については不二夫の母（フキ）から共感的な弁明がなされる。陽子の父は原作の武内の父をモデルとしており、フキ自身も夫を死なせた後悔や身体上の後遺症に苦しみながらも日雇い労働で二児を養う立場である。経済的困窮から愚痴を言い、子供に対して曖昧な返答をするフキは、勝気で口達者な娘（さなえ）に責められ悩む一方、新聞配達で家計を助ける息子（不二夫）を精神的支えとして生きている。母子家庭において父親の役割を背負う不二夫は、長田が原爆の子像に込めた大人の目指すべき理想像を体現した人物といえよう。

さて原爆の子達による大人や社会への批判は第一幕から随所に見られるが、最も舌鋒鋭く声高に叫ぶのは、孤児の竜介である。会員たちが帰った後、不二夫の背後にいつの間にか現れた竜介は、「平和」を冠した行政施策や民間商戦に嫌悪感を示しつつ、彼を引き取った裕福な叔父の造船会社が保安隊用の警備艇や朝鮮戦争に使う架橋鉄骨を製造していることを引き合いに、こんな社会動向の中「こどもがいくらきんでみたって、何のやくにたつもん

かい」と冷笑する。

苦境にある原爆の子は皆死んだ方がいいと思いつめた末、むしろ「おとなが死ねばいい」という結論に至った竜介は、原爆投下直後の大人に見られた利己的行動や、原爆の子を支援する大人の欺瞞にも矛先を向ける。またアメリカのノーマン・カズンによる「精神的里親 (moral adoption)」運動についても葛藤を示し「インチキ」だと言いつ捨てる。ここでは竜介の大人批判が次節で扱うアメリカ批判というテーマへ直結していることを指摘しておく。

竜介が帰った後、舞台上で一人になった不二夫は急に倒れ込む。心配するフキに対して不二夫は気丈に振る舞い、「紙しばいをはじめたら、竜介もまたげんきになるだろう」との希望的観測を語る。

不二夫が意欲を示す紙芝居での啓蒙活動は第二幕でも大きく扱われるが、大澤の前年の戯曲「忘れぬ五月一日」でも主人公が紙芝居の得意な青年に設定されている。大澤の個人的な思い入れの背景にあるものを考えてみると、当時レッド・パージにあった運動家が紙芝居業者に転じて市民運動と教育を結びつけた活動を展開したことや、教育界でも紙芝居に注目が集まっていたことがあるだろう。また一九五二年、東京都教育庁主催の紙芝居コンクールで文部大臣賞受賞の前評判が高かった先述の紙芝居『平和のちかい』が受賞ならず、該当作なしとされたことも、日本の右傾化を示す一兆候として大澤の問題意識にあったのかも知れない。

第二幕では、かつて竜介が収容されていた光明学園を舞台上に紙芝居を上演しようとする鳩の会の社会実践が描かれる。幕が上が

ると学園主事の大石と若い保母の安本が新たに登場する。大石は出所した問題児が保安隊に志願したと聞いて「それはよかろう」とほほえむような体制順応的な大人に造形され、安本は優しく子供に寄り添おうとする女の先生像を踏襲しつつ、後で考察するようにトリックスターのような役割も担う。

大石は不二夫たちが持つて来た紙芝居に目を通して、刺激の強すぎるものを見せるのは、「ねておる子をおこすようなもの」だと難色を示す。大石が慎重になっているのは、原爆という題材を扱うことにより孤児の中でアメリカへの憎しみが助長されないかという懸念からで、原爆投下は戦争を早く終わらせるためだったという説や、日本軍の細菌部隊保有が戦後発覚した事件を引いて、「もう原爆のことなぞすつかりわすれて、日本を復興していく、それが第二の国民たる君たち少年少女の義務だ」と言う。これに対し子供達は「原爆だって細菌だって、一ばんそんなのはぼくたち」だと食い下がる。ここでは、アメリカの加害を日本の加害によって相殺しようとする大石のロジックが、大人の加害と子供の被害という図式によって脱構築される。

四、豹変する大人達のアメリカコンプレックス

本節ではアメリカ批判をテーマに論じる。本作での大人批判はアメリカ批判に連結し、アメリカに対する本音と建前に揺れる二人の教育者の葛藤が少年の言動を通して露呈する姿も捉えられている。

大石 原爆の子はとういギセイでした。しかしそのおかげで、日本はソ連でなくアメリカに占領されることができたのですよ。(中略)

安本 それはそうよ。原爆をおとしたのは大きな罪悪でしたわ。でも(中略)あのことはもうゆるしてやるほかないでしょうね。

不二夫 でもアメリカはどんどん新しくこしらえてるそうです。何べんも爆発の実験をやったそうです。そればかりでなくて、朝鮮の戦争でも使うぞといっておどかしたそうです。

安本 (ヒステリカルに) 使うならつかわせたらいじやありませんか。原爆戦争になって自分の国にも、たくさん原爆孤児ができてみたら、そしたらアメリカの政治家だってわかるでしょうよ。おたがいにいがみあってばかりいて、いつになったら平和がくるんですか。なんじの敵を愛せよとおっしゃった主の教えにそむくものは、きつと裁かれるに決まっていますわ……(泣く)

不二夫 (熱っぽく頬をもらして) ぼくたちは原爆のことなぞ忘れてしまいたいです。だけど忘れることができません。

ぼくたちの傷はまだなおってはいないんです。ところが朝鮮ではもう戦争がはじまっています。朝鮮を爆撃しにゆく飛行機が、毎日毎晩ぼくたちのまわりからとびたつていきます。

朝鮮のこともがかわいそうです。ぼくたちだって、二度とあんな目にあいたくはありません。だけど、先生、もしも原爆をつんだ飛行機が、日本からとびたつことになったらどうなるんです。アメリカに占領されたのがそんなに仕合せ

だったのなら、どうしていつまでもこんな心配ばかりしなくちゃならないんですか。ぼくたちをこんなに苦しめている原爆のことを扱った紙しばいをこのお友だちにみせてはどうしていけないのでしょうか。

ここでは、当初、子供相手に体制順応的説得を試みていた安本が突如「ヒステリカル」に泣いて、聖書の言葉を引用しつつ破壊的な意思表示をする。被爆者でもある安本が豹変したきつかけは、不二夫の指摘したアメリカの動向への反感である。彼女の発言内容自体は不二夫の肩を持つものではないが、激しい情動は結果的に不二夫の強い主張を後押しすることになる。

唯一大人の立場に取り残された大石が動揺していると、園長の井上が登場し、子供達の熱意にこたえて講堂で紙芝居を見せるよう手配する。井上園長は一見、原爆の子の味方にふさわしい大人のようにだが、偽善者のな一面を持つ人物に造形され、竜介からは「キツネ」と陰口をたたかれている。

続く場面では学園の経営難が語られ、井上はABCへの協力を拒んだ園児の少年（一也）を呼び出すが、以下の二人のやり取りには井上の理想と本音のせめぎあいが生々しく描かれる。

井上 いいなあ、君たちは。ジープのせてもらった上に
そんないろいろもらえるんだから。……先生が子供なら、ひと月に一ぺんじゃ少いってうぞ。（中略）

一也 そんなら一ぺん自分の子供をやってみな。
井上 ……。 （中略）

一也 （笑いながら）ばかにすんなよ、いくら子供だって、あすこじやただ診るだけでぜったい治してなんかくれねえくらい知ってたぞ。みんながかけじゃ、人間モルモット研究室だっけってるんだ。だから学校でも、行かねって断然拒否する者が何人もいらあ。これが自由主義つてもよ。

井上 こどもというものは、もつとおおらかに、人類の幸福のためには、すすんで自己をギセイにするようではなくてはいけない。科学にこうけんができたうえに、お菓子やおもちやまでもらえるなんて、こんなけつこうなはなしはないじゃないか。

一也 ケツこじぎ野郎。

井上 なにい。（中略）人が白い歯をみせとればつけあがって、こら、いまきさま何といたのか。（中略）浮浪児だったお前なんか、ちゃんとした屋根の下で衣食にも不自由なくくらしてゆけるようになったのはそもそも誰のおかげだん。……さ、行こう。先生と一しよにこい。（やさしく）ね、行つてくれるでしょう。いい子だから、さあ……。 （一也の腕をつかむ）くるんだ。

一也、ふりきろうとしてもがき、（中略）へやの隅ににげ、体をいびつにねじつたまま、ひじをあげて身をふせぐ。二の腕のケロイドが、あらわにみえる。

井上 （羞恥とあわれみにおそわれ、背をむけて、こうふんをすずめながら）行け。……（一也、脱兎のようにかけだそうとする）……おい待った。（卓上の菓子を一つとって一也をつかまえ、むりににぎらせようとす。一也、反抗的にこぼんでかけ去

ってしまう)

この場面では、原爆の子の支援者である大人が、真の庇護者を失った原爆孤児の捨て身の反発によつて態度を硬化させる様子が描かれる。一也の痛々しいケロイドを見て我に返つた井上の罪悪感やララ物資(アメリカの慈善団体からの救援物資)によるお菓子の形で償われようとするが、一也はこれを拒む。

「こじき野郎」という一言に逆上した井上の心理には、財政難から多くの援助に頼らざるを得ない経営者としての不甲斐なさも感じ取ることができる。長田をはじめ原爆の子を支えた大人達には、自分が直接的あるいは間接的に傷つけた子供達への罪滅ぼしの意識があつたことは想像に難くない。そうした中、アメリカの有志による原爆孤児支援がメディアで好意的に報道されていたことについて長田は否定的見解を示していた。長田は、原爆を投下したアメリカ側から援助を受けることで孤児本人が「不潔感に苦しむことはあるまいか」という感覚に基づき⁽³³⁾、のちに国内での「精神的里親」縁組制度の整備につとめた。このような感覚や「原爆の子にこたえて」で強く表明される民族的連帯志向は、当時支配的だった言説とも関連づけて検討する必要がある⁽³⁴⁾。

ともかくも本作第二幕から読み取れる原爆孤児支援の課題は、長田の危惧と軌を一にするものである⁽³⁵⁾。すなわち原爆孤児の置かれた厳しい環境は、個人や家庭や孤児収容施設等の組織の努力だけで改善するものではなく、日本社会全体の問題として、アメリカの援助を離れたところに支援体制を構築し取り組むべき問題だということだ。

五、原爆の子の死と原子力の夢

前節で扱った大人の態度の豹変は、少なくとも子供に向き合うとする立場の者の反応だつた。彼らと対照的な態度をとるのが第三幕に登場する病院の医師(松村)である。彼は、不安を訴える原爆の子に対しても科学的見地からの返答に徹し、竜介からの批判や暴言も「脳をやられているらしい」と切り捨て、ABCに協力する姿勢を崩すことはない。

現実の悲哀を知る孤児たちが大人やアメリカへ鋭い刃を向ける一方、理想に燃える不二夫は孤児院での紙芝居実演の最中に倒れ、第三幕では病院での最期を迎える。白血病と診断され死期を悟りつつも「もつと生きていたい」と泣く彼は被爆当時の悪夢に苦しみながら何かと格闘するようにもがき、母の腕の中で力尽きる。

不二夫 ああ、死にたくない。(中略) 全身の細胞がぐずれてゆくようだ。内ぞうがのこらずくさつてゆくようだよ。…

熱のでるたびに、いやな夢をみる。(中略) 七年まえのあの日だ。(中略) 息がくるしくなつて、どこかとおい、くらあいつところへひきずりこまれていった。あのとき、もうだめだ、おぼれ死ぬのだとおもつた。(中略)

フキ ね、それでもあのときあなたは死ななかつたじゃないか。お母さんが水の中からひきあげたのよ。だからこんども…

不二夫 (微笑して) うん、お母ちゃんの手だったね(中略)

(急につよく) ぼくはなぜ死ななくてはならないんだ。…ぼくはなぜ生きていてはいけないというんだ。(眼をひからせて半身をおこし、死の苦悶にのたうちながら) …うぬ、死んでたまるか。(中略) 原子力がなんだ。まけてたまるか。こい、うぬ、こいッ…。

不二夫が動かなくなつた後、医師(松村)が若い男とA B C Cのジープの運転手を引き連れて病室に入ってくる。若い男は傷害調査委員会の名刺を差し出し、遺体解剖への協力を要請する。「解剖および葬儀に要する自動車費の一さいを委員会の方で負担させていただきます」と申し出る男に、フキは「かえつてください」と声を震わせ、竜介は、A B C Cが原子症の研究をしているのは「原爆戦争の準備」が目的だろうと鎌をかける。男は「わたしは職員として命令でうごいてる人間ですから」と言いよどみ悪態をついて出て行くが、ジープの運転手だけはその場に留まり、「じっさいいやなつとめなんですよ、わしだつて日本人ですからねえ」、「こんどストライキをぶつて、車をとめるんです」と言い残して去る。

死にゆく不二夫の鬨争的態度や遺族たちの「日本人」としての連帯意識は、長田や原爆の子友の会の主張に大澤自身の信念も重ね合わせられたものといえる。また、同時期に『新潮』へ「魔の遺産」を発表していた阿川弘之は、原爆症で亡くなった子供の死体解剖の場面の描写にあたって林芳郎『一郎』⁽³⁶⁾を借用しているが、大澤はこれにも目配りしていた可能性があるだろう。不二夫の遺体を前に母や竜介らが立ち尽くしていると、さなえ

が無邪気に駆け込んでくる。彼女は兄の死に気づかないまま、鳩の会への賛同者たちから届いた手紙を読み上げ、それが「原爆の子よ、よみがえれ、よみがえれ、平和のなかに」と結ばれると、舞台には花や果実あふれる沃野が広がり、遠景に近代都市建築のぞむ幻想場面が立ち現れる。小鳥のさえざりは日本風童謡のメロディとなり、不二夫はベッドから起き上がる。世界各国の服装をした子供たちが踊りながら舞台を横切り、歌がやむと、不二夫にかけよる。その中には大阪で入院しているはずの陽子もいる。以下に引くのは、舞台上の子供たちの会話である。

不二夫 いったいここはどこなんだ。ぼくはこの国にいるんだらう。

新一 ここは広島さ。君は日本にいるんだよ。

不二夫 これが広島。これが日本。…それではあの比治山の家から、町全体をみおろしていたA B C Cのカマボコ御殿はどこにあるんだ。

新一 A B C Cは退散した。そのときからここは日本国になつたんだ。(中略)

とおくで爆発音。(中略)

秋子 天にこだまし、地をゆるがすあのすばらしい叫びをきいてください。あれは原子の声です。(中略)

吉彦 ソヴエト連邦では、原子力を利用してウラル山脈とコーカサス山脈のあいだの巨大な岩石台地を原子ばくはつて吹きとばした。

竜介 それは戦争のためではない。(中略)

新 原子の力が電氣をおこしすばらしい動力のみなもとになる。(中略)

文吉 それが平和の動力源として活用されるのに反対するのは電氣、石炭、石油事業を独占して肥えふとっている人たちだけです。(中略)

敏子 原子力によってつくられた白血病が原子力によってなおされる日も決しておこほないでしょう。

不二夫 あゝ、ぼくは生きぬかなければならない。ぼくはその日をひきよせるために生きぬかなければならないのだ。

新 その日はくる。きつとくる。広島の方に、原子力発電による灯がまひるのようにかがやき原子力の電車がはしり、機械がまわり原子力による船が、宇品や呉の港から平和の海へでてゆく日が。(中略)

竜介 ぼくたちが来させるのだ。

陽子 不二夫さん、あなたも。(手をのべる)

皆 さあ、みんな、一しよに。(手をのべる)

作文集序文の記述を踏襲したこの場面には、ソ連での原子力事業の成功を示すなど大澤の思想的立場も反映されている。こうして終幕となるが、演出の註では「さいごを全員合唱で結ぶ」ことが指示され、「観客もやがて一しよに歌いだすに違いない」とある。

原子力の平和利用を実現可能な夢と捉えた本作の結末は、原発安全神話が崩壊した現代に生きる私達には受け入れがたい。しかし、こうした未来像は、同時期、西条療養所で闘病中の峠三吉が「朝」や「その日はいつか」などの詩に描いたような民族独立解

放の上の原子力ユートピアにも呼応するものである。また、この場面自体も、一九五〇年に峠が朗読した「墓標」の結部を彷彿させるものとなっている。

君たちよ

もういい だまつているのはいい

戦争をおこそうとするおとなたちと

世界中でたたかうために

そのつぶらな瞳を輝かせ

その澄みとおる声で

ワッ!と叫んでとび出してこい

そして その

誰の胸へも抱きつかれる腕をひろげ

たれの心へも正しい涙を呼び返す頬をおしつけ

ぼくたちはひろしまの

ひろしまの子だ と

みんなのからだへ

とびついて来い!

(峠三吉「墓標」⁽³⁷⁾)

小学校跡地の物言わぬ木柱に語りかける峠の詩は一九五一年の詩集が成るまで複数メディアに転載されたが⁽³⁸⁾、この夢幻イメージを下敷きにしたであろう「戯曲 原爆の子」のラストシーンは、映画『ひろしま』で蘇った死者たちの無言の抗議よりも希望に満ちた演出と言える。

核被害の悲惨を知る原爆の子自身らの手で差し出された建設的展望は、主人公の死に救いを求める観客たちを感動と共に説得し、その後の事件をまだ知らない当時の社会において広く受け入れられたことだろう。

おわりに

原爆の子に「雄々しく」あれと願う長田の主張には理想的父親像が内包され、後年、中沢啓治『はだしのゲン』（一九七五・八七）の人物造形にも影響を与えた可能性がある⁽³⁹⁾。

ただ、ここで確認しておきたいのだが、現状として「原爆の子」といえば彼ら少年ではなく、「サダコ」という一人の少女ではないだろうか。折り鶴に祈りを込めた少女は日本の平和教育に欠かせない物語を提供しアメリカを含む海外でも受容された。

本稿では長田の提示する原爆の子像に則って、少年を中心に「戯曲原爆の子」を考察したが、戯曲中にも名称の出た「原爆乙女」についても今後調査する必要があると考える。この用語自体に問題があることは既に当事者や先行研究により指摘されているが⁽⁴⁰⁾、論者は「原爆乙女」をフィクション上の記号ととらえ、現実の女性被害者に、社会における模範的少女表象と、死と親和性の高い芸術概念としての処女を三重写しにしたものと仮定している。

母さまが焼け死んでゆくその苦しい寸前のことが胸にやきつけられて離れない。(中略)美恵子は、だんだんと暗い性格の持ち主となっていた。ほとんど笑うこともない冷たい人

間になった。(中略)ああ、残酷だ。他人には発表したくない。この小さな胸の内に秘めておきたい。広島市に原子爆弾が落ちた。そして、美恵子の心にも落ちたのだ。心を傷つけられたのだ。明るくこの一生を有意義に過ごそうと思っているがだめだ。だんだんと暗くなるばかりだ……。

これは、武内健二の記事の直前に掲載された手記の結末部だが、武内と同じ学齢の少女によるこの文章には一人称を「美恵子」とした少女小説のようなレトリックが用いられ、最後は長田が理想とする原爆の子の態度とは真逆の心境のまま筆がおかれている。作文集には目次もなく五十首順でもないため、長田が武内の前に彼女の作文を載せた理由を探ることは難しい。確かなのは、長田はこの少女のような原爆の子の訴えにも意義を認めつつ、あえてその悲観的態度を超越する理想を打ち立てようとしたことだ。

大澤が戯曲で示した健気で力強い原爆の子像には、後に「原爆の子」としてクローズアップされた「サダコ」のイメージ形成への影響を指摘することも出来よう。すなわち白血病に罹患しつつも最後まで諦めず回復を信じていた点はそのままだに、葉包紙で千羽鶴を粘り強く折り続けるという行為に「原爆乙女」像を重ねて模範的少女の行動主義を見れば、「原爆の子」と「原爆乙女」を止揚した存在として「サダコ」は立ち上がったて来るのかもしれない。

もちろん、このように再生産される子供や女性の表象は、そのイメージを楯に発言する態度と共に、賛否両論にさらされてきたと考えられる。今後は作文集『原爆の子』の受容研究を

通して、「たれの心へも正しい涙を呼び返す」という屈託のない表現の可能性を再検討することが課題である。

注

- 1 長田新編『原爆の子——広島少年少女のうたえ』一九五一年十月二日、岩波書店。
- 2 長田新編『原爆の子にこたえて』一九五三年九月十八日、牧書店。
- 3 津上忠「追悼劇作家・大澤幹夫さんへの追悼としての回想」『民主文学』一九九九年八月号。
- 4 『テアトロ』一九五二年六月号、テアトロ社。
- 5 初出は『婦人公論』一九五三年八月号、中央公論社。大澤は『婦人公論』に掲載したものは、「序曲をばういた部分に多少の整理をこころみたもの」であって、『原爆の子にこたえて』のものが定稿だとしている。なお、『婦人公論』では一九五二年の新年号から平和に関する特集が盛り上がりを見せていた。
- 6 作文集に採録された記事の中に佐々木禎子のものはない。五歳で被爆した後「光の園」に入所して洗礼を受けた佐々木弥栄子という少女の作文に「さだ子お姉さん」が登場するが、経歴から別人と判断できる。
- 7 『原爆の子』三九頁。これは序にも引用された坂本節子の文章「先生は雛鳥をいたわる母鳥のように両脇に教え子を抱かれ、生徒は恐れわなく雛鳥のように先生の脇下に頭を突込んでいます」という表現からの連想か。
- 8 『原爆の子』三二頁。
- 9 『原爆の子にこたえて』一一頁、三〇頁。
- 10 「おとなはばかだ」、「昔の人げんはばかだ」、「なぜ前のおとなはせんそうというおそろしいものをしらなかつたのだろう」というような表現。峠三吉編『詩集 原子雲の下より——広島の人々の平和のうたごえ』一九五二年、青木文庫。
- 11 子どもを守る会「子供を守ろう」座談会『婦人公論』一九五二年八月号、中央公論社。
- 12 「長田新——「醜の御楯」論から絶対平和論 全貌編集部『進歩的文化人——学者先生戦前戦後言質集』一九五七年、全貌社。
- 13 「私はもともとカントの理想主義やベスタロッチのヒューマニズムで育つた古い型の自由主義者の一人である。その私が、平和運動の決意をしたのは、実は恥しいほど単純で、まるで小学一年生のような考えである。というのはカントはあの『恒久的平和論』の中で：人間には他方また理性がある。その理性の命ずるところに従つて、自己の最善を尽すほかに、吾々人間の生きゆく道はない。…この地上に人間最大の夢乃至理想と云つてよい平和を実現すべく、自己の最善を尽くそうと私の思っているのは、全くカントの考えに従つているようなものである」『平和』一九五二年十一月号、青木書店。
- 14 佐藤忠男『日本映画史2 一九四一—一九五九』一九九五年、岩波書店。二八九頁。
- 15 作文集『原爆の子』がヒットした背景には同年三月に刊行された無着成恭編『山びこ学校』により子供達の作文集というジャンル自体に注目が集まっていたこともあるだろう。
- 16 「原爆の子友の会」は岩波版『原爆の子』の原爆体験記執筆者すなわち直接間接原爆の被害を蒙った約三千名の子どもたちによって昭和二十七年二月十七日に結成され、原爆の惨害を受けつつもそれ

に負けず、雄々しく立上ってゆくことを会の精神としており、原爆症の調査をはじめとして、今日まで種々の形で平和運動を行ってきたが、日本教職員組合と共同して昭和二十八年八月映画「ひろしま」を製作したことはすでに知られている通りである」。長田新編「原爆の子にこたえて」二四二頁。

17 教育紙芝居研究会編／稲庭桂子 脚本／佐藤忠良 絵『平和のちかい——「原爆の子」より』日本紙芝居幻燈株式会社。

18 石山幸弘『紙芝居文化史』二〇〇八年、萌文書林。

19 『原爆の子にこたえて』三一—三二頁。

20 『原爆の子にこたえて』十二頁。

21 『日本近代文学大事典』一九七七年、講談社。

22 大澤は戯曲づくりにあたって教育雑誌にも目を通していた可能性が高い。例えば『新しい教室』（一九五二年八・九月号、中京出版株式会社）の内容は劇中の孤児施設の場面描写に活かされていると推測できる。

23 一九五三年五月七日、「新劇作家の大沢幹夫氏が「原爆の子」舞台公演企画の脚本を中国新聞社に持参。「広島市民の声を代表する批判を求めにきた」。「ヒロシマの記録一九五三 五月」中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター。同年の一月二十五日から五月二十日まで「中国新聞」紙上で原爆文学論争が繰り広げられており、その関連において大澤の行動がどのような意義を持つかについても今後考察する必要がある。

24 主人公の人物造形について批判を受けた大澤は自註で以下のように記している。

原爆当日の記録をみると、ふだんには信じられぬほどの自己ギ

セイ的な、英雄的なはたらきがあちこちでやられたことがわかる。これは人間性の勝利、日本国民のほこりだ。（中略）筆者は、この部分が作者の頭の中でデッチアゲられたものではなく、橋本正之君の手記（「原爆の子」一五六頁）によったものであることを明記しておこう。全篇を通じてこの不二夫の性格も、決してあたまの中からわりだしただけの理想的人物だというわけではないつもりである。（「原爆の子にこたえて」二二三—二二頁）。

25 初演では昼夜二回。『原爆の子にこたえて』の「あとがき」執筆段階で、福島・山形両県の青年団体による上演が決まっていた。

26 「戦後日本映画は、彼女たちを理想化することによって、戦争の悲惨な記憶を浄化しようとする。国家やイデオロギーがもろくも壊れたあと、その廃墟に、白いブラウスを着た美しい女の先生を立たせ、男に比べれば手の汚れていない彼女たちに、慰撫と再生の儀式的担い手になって（中略）『国破れて山河あり』という連続性を受け継いでもおうとする。」川本三郎『今ひとたびの戦後日本映画』二〇〇七年、岩波書店。

27 「原爆の子友の会」を主な演者に、広島市教育委員会、日本子どもを守る会を主催者とし、日本教職員組合、広島県労会議、NHK、中央公論社、中国新聞社などの後援があった。

28 鴨川郁美「原爆戯曲を覆う抑制」「島」／「ゼロの記録」の受容から『日本文学』二〇一七年十一月号。

29 『原爆の子にこたえて』二二三頁。

30 「ヨウコ」という少女は映画「ひろしま」の中でも劇中行方不明になる少女として登場する。ヨウコの兄のエンドウも、孤児院から裕福な叔父に引き取られ、その事業の朝鮮戦争への協力を非難する点

で戯曲の竜介と設定が重なっている。

31 『原爆の子』二二頁。

32 一九五二年に真杉静枝の呼びかけで最先端の治療を受けることになったケロイドを負った若い女性被爆者たち。劇中では「治療費を何万と人にださせて、東京見物までさせてもらっている」と説明され、「だけど、ただでなおしてくれるのはさんせいだぞ。女の子ばかりじゃなくてばかり男のほうもやってほしいな。男女同権だからな。それも五人や十人じゃ何にもならん、原爆でケロイドになったものぜんぶ、いや、ピカハゲも白血病患者も、原爆でやられたものひとりのこらずだな。そしたらもう見せものなんていわれんですむよ」と評される。

33 『原爆の子にこたえて』二十一―二二頁。

34 この感覚は大澤の戯曲にも引き受けられており、作中の台詞では「日本人でない」という言葉が侮蔑的な含みをもって使われている。

劇中で見られる差別意識はそれだけではなく、井上園長と一也の会話では「自分の子供」と「孤児」との待遇の違いが示唆される。

35 『原爆の子にこたえて』一七―二二頁。

36 別タイトル『一郎 幼き生命の訴え』東和社、一九五一年。一九四九年秋に亡くなった息子の容態悪化から死、死体解剖の様子が描かれる。楠田剛士「阿川弘之『魔の遺産』の方法——写真・引用・聞き書き——」『原爆文学研究』二〇〇六年、花書院。

37 峠三吉『原爆詩集』二〇一六年、岩波文庫。六八―六九頁。

38 黒川伊織「峠三吉『墓標』と一九五〇年夏の広島」『原爆文学研究』

二〇一〇年、花書院。

39 汐文社は『紙芝居はだしのゲン（全五巻）』（一九九一）の刊行に

あたって「主人公ゲンの明るくたくましい生きざま」や「悲しみを未来の糧とする姿が、子どもたちの共感と勇気呼びさます」ことを書いているが、この解説書で作者の中沢は「僕が原爆に対してふっきれたのは、母の死がきっかけです」として、原爆病院で死亡した母の葬式にABCが解剖の要請をしに来た時の怒りを書いている。また、作品中で描かれる戦時中にも反戦を唱えていた父の最期の様子と遺言は、武内の作文のエピソードとも一脈通じるものがある。

中学時代の中沢の作文の一部は『原爆の子』の序文（二六頁）に収録されているので以下に引いておく。

学校につくと、きゆうに思い出した。わすれ物をしたのだ。ぼくは早速家に帰ろうと思い、学校の裏口まで来た時、一人のおばあさんが、ぼくにたずねた。そのおばあさんは、ぼくらの組の人のおばあさんでした。ぼくはそのおばあさんと色々話をしている（江波中、中沢啓治）

40 中谷いずみ『原爆乙女』川口隆行編『原爆』を読む文化事典』二〇一七年、青弓社。